

とぼひき神さま

中住 千春

ほうかごをつげるチャイムがなりました。
二年生のきょうしつは、つくえといすのギ
イギイなる音や、にぎやかなこえがまざりあ
っています。

さやは、ぼんやりとすわったままでした。

「さや、かえらへんのん？」

そういって、走って行くたつきくん。

このクラスで、さやにはなしかけてくるの
はたつきくんだけでした。

(ほっといてくれたらいいのに)

なれなれしいたつきくんに、さやはどんな
ふうにこたえればいいのかわかりません。

いつのまにくばられたのか、つくえの上に
プリントがありました。じゅぎょうさんかん
のあんないです。

くしゃくしゃとまるめてカバンにつっこみ
ました。さやにはかんけいありません。だれ

もこないのだから。おばあちゃんはいそがしいのです。

お父さんとお母さんがなくなって、さやは、おばあちゃんの家に行って来ました。

一人でのんびりとくらしていたおばあちゃん。さやをひきとつたために、今では一日中はたらいています。

ふりきるように立ち上がり、きょうしつをとびだしました。

げんかんに出ると、くつばこのうしろからきこえました。

「ねえねえ、かえりに家によっていかへん？」

「ごめん。今日はピアノのおけいこなんや」

「そっか。ざんねんやわあ」

なれない、この地方のことばです。

「ふっ……」

さやの口からためいきがもれます。

学校かえりのより道も、ピアノのおけいこも、今のさやにはできないことでした。

お父さんとお母さんがいたころは、さやの

家にはしよっちゅう友だちがあそびに来たし、ピアノもならっていました。じゅぎょうさんかんに来てくれるお母さんは、どこのお母さんよりもすてきに見えました。

田んぼの中の一本道を、とぼとぼと歩きながら、さやの心はとんでいきます。

お父さんもお母さんもいたころに……。

お父さんとお母さんが、こうつうじこでなくなった夜のことを思い出すと、さやは今でもいきがくるしくなります。

あの夜。さやの家には、けいさつの人に来て、しんせきの人に来て、知らない人もいっぱい来ていました。

なきつかれたさやは、へやのすみにねかされていました。

だれかが、さやの手をぎゅうつとにぎりました。

目をあけると、おばあちゃんでした。

おばあちゃんのほっぺはなみだでぬれてい

ました。目をつぶって、ぶつぶつとなにかい
っています。いっぺんにとしをとったように
見えました。

さやの耳に大人たちのヒソヒソごえがひび
いてきます。

ヒソヒソ　ヒソヒソ

（やめて。もうやめて。お父さんとお母さん
のはなしをしないで。お父さんとお母さんが
いないなんて、うそだっ、うそだっ）

心の中でさけびつづけていました。

（うそだっ、うそだっ、うそだっ）

あれからはずっと、さけびつづけています。

「うそだっ」

こえにだすと、なみだがでてきます。

そのとき、うしろからよびかけられました。

「おーい、さやー」

また、たつきくんです。あわてて目をぬぐ
いました。

「これ、うちの母さんが、ばあちゃんにつて」
たつきくんの家とさやの家はちかくで、お

ばさんとおばあちゃんはなかよしでした。

さしだされたふくろをうつむいたままうけとると、（どうも）と口の中でつぶやきます。

「あのかなー。うちのハナにもうすぐ子犬がうまれるんや。うまれたら、見においでよー」

たつきくんのこえが、おいかけてきました。が、しらんかおをして足をはやめました。

げんかんにはいると、おばあちゃんのくつがありました。さやは家にかけてきました。

「さや？ おかえり」

「おばあちゃんっ」

さやは、おばあちゃんにとびつきました。

おばあちゃんがいてくれたのです。かえってもまたひとりぼっちだと思っていたのに。

おばあちゃんのかおを見ると、こらえていたなみだがあふれました。

「どうしたん、さや？ だれかにいじめられたんか。ばあちゃんにはなしてみ」

おばあちゃんはあたたかいむねに、きゆう

つとさやをくるみこんでくれました。さやは首をふると、なきだしてしまいました。

ことばにはできないけれど、さやのむねの中は、いつもなにかでぎゅうぎゅうづめでした。

それは、かかえきれないくらい、おもたくて、大きかったのです。

おばあちゃんはなにもいわずに、トントンとさやのせなかをたたいてくれます。

さやはなきたいだけなきました。

さやのなきごえが小さくなったころ、おばあちゃんは、はなしはじめました。

「さや。ばあちゃんの子どものころなあ、こんなことをよくいわれたんや。(とぼひき神さまがとぼひくぞ) ってな」

「とぼひきかみさま？」

まっ赤になった目をあげました。

「(とぼひく) っていうのは、とぼ. っていうぼうで、たいらにならすっていうことや」

おばあちゃんはむねの前でりょう手をあわ

せて、おを作ります。

「こんな一斗いっとます(注1)っていう入れものに米を入れて、やきゅうのバットとぼうみたいな斗棒(注2)で引いてたいらにするんや。ならすっていうんやけどな」

「うん」

「そこからきた、いいつたえやろなあ。たとえば、つらいことがあってもな。とぼひき神さまがとぼひいてくれるから、たいらにしてくれるから、いつか、ちゃんと、しあわせがくるっていうことや。わるいことばっかりつづかへん」

さやは、大きく目をみひらきました。

「そのほんたいもあるで。今、しあわせでも、そればっかりつづかへんで、ちようしにのつたらあかんっていうことなんや。わかるか？」
「うーん。なんとなくわかるよ」

おばあちゃんは、うたいました。

とぼひきかみさま　とぼひくぞ

しんどい やまみち つきくずし
つらい たにぞこ うめつくす
とぼひきかみさま とぼひくぞ

「こんなうたもあった。しんどい山道つきく
ずし、つらいたにぞこうめつくす、んやで」
「しんどい やまみち つきくずし つらい
たにぞこ うめつくす……」

さやもこえにだしてみます。

「そうや。つろうても、つろうても、しんぼ
うしような。きつと、ええことがまっとうで
な。とぼひき神さまが、さやの行く道もなら
してくるからなあ」

「ほんど？」

「ほんまや。さやは今、いっぱいつらいから、
いっぱいいっぱいええことがまっとうで」

おばあちゃんのことばは、さやの心にする
するっとはいつてきました。

(今つろうても、ええことがまっとう)

さやは、かんがえました。

（いつか、このくるしきからぬけだせるの？
いいことがまってるの？ ほんとうに、とぼ
ひき神さまがとぼをひいて、ならしてくれる
の？）

「でもな、さや。とぼひき神さまがとぼひく
つていうても、さやがないてばかりで立ち
止まっとったらあかんよ。神さまは、さやの
行く道をならしてくれるんや。だから前をむ
いてすすまなあかんのんや。ちよつとずつで
もええからな」

おばあちゃんは、さやのかおをのぞきこみ
ます。

さやは、こっくりとうなずきました。

その夜のことです。

ざざざざざざー

ずん ざら ざらざら

ずん ざら ざらざら

（何の音？）

さやは、くらやみの中に立っていました。

音のする方をふりかえります。しようじのすきまから、ほそながい光が見えました。おそるおそる近づいてのぞいてみます。明るく広い、くうかんに、かぞえきれないくらいたくさんの丸いおけがならんでいました。

まん中に立っているのは、白いきものおじいさん。手には、ぼうをもっています。

ざざざざざー
何かが上からおちてきました。

おけに山を作って、ふちからこぼれだして
います。黄^{こがねいろ}金色のつぶ。

（お米？）
おじいさんはぼうの両はしをにぎって、おけのふちに合わせると、手前にぼうを引きま
した。

ずん ざら ざらざら
もり上がっていた米はたいらにならされて、
おけのひょうめんがぴっちりとそろいました。

ざざざざざー

すぐに、となりのおけに米がふってきま
した。

今度は米が少なく、おけのふちまで足り
ません。おじいさんは手にもったぼうをまっ
すぐに天にかざしました。

ざざざー

米がふってきます。

ずん ざら ざらざら

ぼうでならします。

そして、また次のおけ、次のおけ。

おじいさんは米の山をくずしたり、足りな
い穴をあなうめたりしながら、次々とならしてい
きました。

さやは口をぽかんとあけて、見つめていま
した。

ざざざざざー

ずん ざら ざらざら

くりかえされるこの音が、耳とむねに気も
ちよくひびきます。

さやの心が（ずん ざら ざらざら）とな

らされていくようです。

気がつくと、ふとんの中にいました。

（ずん ざら ざらざら）がまだ耳にのこっています。

「とぼひき神さまが、とぼをひく」

こえにだしていつてみます。さやは、ふとんからぴよんとおきあがりました。からだがとてもかるくかんじました。

学校へ行こうと、げんかんを出ると、たつきくんが立っていました。走ってきたのか、ほっぺがまっ赤です。

「きのう、うまれたんや、ハナの赤ちゃん」

「えっ」

「三びきや。見に来るか？」

「うん」

しぜんにとびだしたことばにじぶんでもおどろきました。もっとおどろいたのはたつきくんのほうだったようです。目を大きくみひらいてはやくちでいいいます。

「ほんまに来るんか？」

「うん」

「それなら、今から行こ」

たつきくんはランドセルをガシヤガシヤと
ならして走りだしました。さやもあとをおい
かけます。

たつきくんの家のうらに小屋がありました。
戸口からそつとのぞくと、すみでうずくまっ
ている、母犬と三びきの子犬。

「わあー、かわいいー」

ハナのからだにすりよって、子犬たちはお
っぱいをのんでいました。

ぬれたようにつやつやとした毛なみは、三
びきともハナよりうすい茶色でした。

「まだ、目は見えへんのんや。二週間ぐらい
したら見えるんやって。さわってみ」

たつきくんが一びきの子犬のせなかをそつ
となでました。さやもおそるおそる手をのば
します。

子犬のせなかに手をあてると、しっとり

していて、ほわっとぬくもりがつつたわってきます。

トク、トク、トクとこきゅうにあわせて小さくなみうつせなか。

「あったかいね。トクトクなってる」

「生きとうからな」

まじめなかおをしてそういうたつきくんに、さやはぷつとふき出してしまいました。

「あー、わらった」

たつきくんがさやをゆびさしました。

「ご、ごめんなさい」

「ちがう、ちがう。さやのわらったかお、見たことなかったでびっくりしたんや」

「えっ」

さやはいっしゅん何のことかわからず、きよとんとしました。

「たつき、学校おくれるでー」

家のほうからおばさんのこえがしました。

「行こっ。またかえりに見に来たらええか

ら」

「うん」

（わらっていないなかったんだ、わたし）

たつきくんにいわれるまで気がつきませんでした。なんだか、はずかしい気もしました。

さやおばあちゃんのことばを思い出して
いました。

（前をむいて、すすまなあかのんや）

じゅぎょうさんかんの日になりました。

教室はザワザワとおちつきません。

「お母さん、来るん？」

「うん、来てくれるで」

「うちは、お父さんやでー。さいあくー」

みんなは、ちら、ちらとふりむいています。

教室のうしろにならぶお父さんやお母さん。

だれも来ていないのは、さやだけでした。

（だいじょうぶ。気にしないもん）

さんかんのことはおばあちゃんにはつたえて
いません。

じゅぎょうがはじまってしばらくたったこ

ろ、前のせきのたつきくんがふりかえりました。こえをださずに口だけでなにかをいっています。

「ばあちゃん、来とう」

「えっ」

ちらつとうしろにかおをむけました。

（おばあちゃん！）

おばあちゃんがいました。すみれ色のよそゆきのカーディガンをきて、せの高いお母さんたちのあいだに小さくなって立っています。にこにこかおで立っています。

おばあちゃんのいるそのぼしよだけ、さやには、ぽうつと明るく見えました。

（わたしのおばあちゃんだ。わたしの家族だ。）
しぼんでいた気もちがぐんぐんとふくらんでいきました。

「では、次の文を読める人？」

先生がといかけました。

さやのむねがトクリとなりました。じゅぎょう中、手をあげたことは一度もありません。

それどころか、学校でこえをだしたこともありません。でも……。

さやは右手をにぎりしめました。

スー、フーと小さくしんこきゆう。

にぎった右手をはげますように、左手でさすります。

（おばあちゃんが見ていてくれる）

さやはゆうきをふりしぼりました。

「はいっ」

さやの大きな声に先生は目をまるくして、友だちはちゆうもくしました。

（すすもう、ちよつとでも）

せなかいっぱいに、おばあちゃんをかんじます。

先生にさされた、さやは、せいっぱいこえをだして読みました。

パチパチパチ

小さくはくしゆがきこえました。思わずふりかえると、おばあちゃんでした。

まっ赤になってうつむいて、さやは心の中

でつぶやきました。

（来てくれてありがとう）

ハナの子犬たちはすくすく大きくなっていました。

しつぽの先が白いのが、さやのお気に入り。
（シツポ）とよんでいます。

三びきの中でいちばん体が小さくて、おっぱいをのむのも、ほかの二ひきにさきをこされてえんりよがち。

「ほらほら、もっと前にでて。しつかりのんで、大きくなるのよ」

さやは、そんなシツポを気にかけて、とくべつせわをやいています。

「もうちよつと大きになったら、このシツポ、さやにあげるで」

たつきくんがいました。

「ほんと？　うれしい！」

今では、たつきくんはさやのいちばんの友達です。しゅくだいをおしえあったり、い

つしよにハナのさんぽに行ったり……。

たつきくんとなかよくなると、しぜんにク
ラスの子たちともうちとけていきました。

今日、さやの家にシツポがやってきました。

シツポはずいぶん大きくなっていて、首わ
とリードをつけると、一人前です。

「シツポ、さんぽに行くよ」

さやはリードをにぎりました。

たつきくんもハナもいっしよです。

二ひきをおいにかけて走りながら、たつきく
んがいました。

「母さんがいっとったけど、シツポは今日の
夜、夜なきするやろうって」

「夜なき？」

「うん。子犬はお母さん犬からはなれたとき、
さみしがって夜中にほえるんやって」

「ふーん。シツポ、かわいそう」

「それぞれ。かわいそうやってだっこしたり、
食べ物あげたりしたらあかんのや。あまえ
てしても、もつとなくんやって」

「そうなんだ」

「母犬のおいのするものをそばにおいてやるとええんやって。ハナのもうふがあるから、もってかえつとき」

「うん……」

「だいじょうぶやって。はやいときは二、三日でおさまるらしいから、がまんやで」

「わかった」

さやはうなずきました。

クウン キュン キュン キュン

その夜、シツポがなきだしました。お母さんをもとめて、かなしそうになくシツポ。

ハナのもうふのきれはしにはなをこすりつけて、においをかいでいます。さがしものをするようにもうふをさぐっていました。

クウン キュン キュン キュン

さやは、いてもたってもいられませんでした。そばへ行って、こえをかけた。だっこのしたい。あんしんさせてやりたいと思いました。

（だいじょうぶだよ、シツポ。わたしがついてるからね）

心の中ではなしかけます。

お母さんのいないさみしさは、だれよりもわかるさやでした。

クウン キュン キュン キュン

シツポはなきやみません。

となりのふとんで、おばあちゃんもおちつかないようです。

「シツポ、かわいそうやなあ。そやけど、がまんせなあかんのやなあ」

おばあちゃんがぼそぼそといいました。

「うん。あまやかしたらだめなんだって」

さやは、ふとんをかぶって、なきごえにじつとたえました。

（がんばれ、シツポ）

つぎの夜も、つぎの夜も、シツポは夜なきをしました。

さやはたつきくんのちゅうこくをまもって、あまやかさないようにがまんしました。

「お母さんがいなくてもだいじょうぶにならなくつちやね」

じぶんにもいいきかせるように、シツポを見まもりました。

五日目にして、やっと、夜なきはおさまりました。ハナのもうふによりそって、クークーとよくねむるようになりました。

「シツポ、よくがんばったね」

シツポを力いっばいだきしめます。のりこえたシツポは、たのもしく見えました。

シツポはもうすっかり、さやの家になれています。小さなシツポがいることが、さやにはうれしくてたまりませんでした。

一人で家にかえっても、シツポがまっついてくれるとさみしくありません。

おばあちゃんのつぎに家族がふえました。

その日、おばあちゃんの仕事は休みでした。

学校がおわると、さやは、おおいそぎで家にむかいました。

（おばあちゃんとシツポがまってる）

家のちかくまでかえったとき。

「えっ、きゆうきゆうしや？」

とおくの方でサイレンがひびきました。きよろきよろと音のする方をさがします。さやの家の方です。

フツとよぎったのは、（おばあちゃん？）

さやは足をはやめます。

（おばあちゃんじゃない）

でも、この道の先にある家は少ないのです。

（おばあちゃんかもしれない）

気がつくのと、走っていました。つきあたりにさやの家が見えてきました。家の前からきゆうきゆうしやが出てくるところでした。

「おばあちゃんー」

大きなこえでさけびます。

「おばあちゃん、おばあちゃん」

さやの目の前を、きゆうきゆうしやはサイレンをならしてかけぬけていきました。

「まってー」

きゆうきゆうしやおつて、さやはかけだ
しました。けれども、あつというまに見えな
くなってしまった。サイレンの音がおざか
ります。それでも、さやは走りつづけました。

（お父さん、お母さん）

あの夜がよみがえります。

（おばあちゃん、しなないで。お父さんとお
母さんみたいに、さやおいていかないで。

おばあちゃん、おばあちゃん）

いきができなくなります。足がもつれます。

よろけて、すわりこんでしまいました。

（おばあちゃん、しなないで。とぼひき神さ
まがとぼひいてくれるっていったでしょ。え
えことがまっとうっていつてくれたでしょ）

とぼひきかみさま とぼひくぞ

しんどい やまみち つきくずし

つらい たにぞこ うめつくす

とぼひきかみさま とぼひくぞ

おぼえたうたを心の中でくりかえします。

キーンツ

そばで、じてんしやがきゆうブレーキをか
けました。たつきくんです。

「さや、よかった。どこまで行ったんかと思
った。だいじょうぶ。ばあちゃん、ちよつと
気分がわるくなつてたおれだけや。ねっち
ゆうしようかもしれへんって、母さんが言う
てたで」

「ねっちゆうしよう？」

「うん、あつい中、草ひきしとつたんやつ
て」

「ほんとにだいじょうぶ？」

「うん。ばあちゃんのはこばれたびよういん
まではとおいんや。走ってなんか行かれへん。
家でまっついていよう」

たつきくんはそういうけれど、さやの気も
ちはおさまりませんでした。

「ううん、今からびよういんまで行く。おば
あちゃんにあいたい。どうしてもあいたい」

おばあちゃんのかおを見ないと、あんしん
できません。

「うーん。じゃあ、ついていっちらるわ。さ
やは、びょういんもしらんやろ？」

そういうと、たつきくんは、じてんしゃを
おりて歩きはじめました。

「ありがとう」

さやは、ほっとして立ちあがりました。

（おばあちゃん、まっててね）

はや足でたつきくんについていきます。

二人はだまって歩きつづけました。

うすぐらくなるころ、やつとびょういんに
たどりつきました。

夕方のびょういんは、ぎわざわとざわつい
ていました。

うけつけでたずねると、さやはすぐにおば
あちゃんのびょういんにあんないされました。

ベッドでよこになっているおばあちゃん。

よくねむっているようです。

おばあちゃんのかおを見て、さやは、へなへなとそのぼにしゃがみこんでしまいました。からだ中からふーっと力がぬけました。

「おばあちゃん……」

小さなこえに、おばあちゃんが目をあけます。

「さや？」

「おばあちゃんっ」

さやはだきつきました。

「さや。しんぱいかけてしもうてごめんな」
何にもいえません。おばあちゃんにしがみつきます。はなしたくない。はなれたくない。つたのです。

「びっくりさせたなあ。でも、もうだいじょうぶやからな。ごめんなあ」

おばあちゃんは、ごめんな、ごめんな、とくりかえしいいながら、さやのせなかをトントンとたたいてくれました。

おばあちゃんのトントンは、いつもさやの心をなだめてくれます。

かおを上げて、さやはおばあちゃんを見ました。おばあちゃんは、さやの目を見て、しつかりとうなずいてくれました。

「よかったあ。おばあちゃん、とぼひき神さまのあのうたね、わたし、知らないうちに何回もうたっていたよ」

さやはうたいます。

とぼひきかみさま とぼひくぞ

しんどい やまみち つきくずし

つらい たにぞこ うめつくす

とぼひきかみさま とぼひくぞ

「ええことがまっとうっていつてくれたでしよ。だからしんじてた。おばあちゃんは、ぜったいだいじょうぶだって。心のどこかでしじてた」

「そうやなあ、さや。えらかったなあ」

ゆつくりと、おばあちゃんは、からだのむきをかえて、さやの手をとります。

「さや。ばあちゃんの道も、とぼひき神さまがならしてくれたんやで」

「えっ」

「ばあちゃんもなあ。いっぱいいっぱい、つらいことがあったんや」

そういうと、そのまま、何かをかんがえるように、うつむいてじっとだまっています。

さやの手をつつむおばあちゃんの手がふるえています。

（おばあちゃん？ ないているの？）

白いものがたくさんまじったかみ。しわがきざまれ、日にやけたかお。ざらざらとかたくなった手のひら……。

（いっぱいいっぱい、つらいことがあったんや）そういったおばあちゃん。

おばあちゃんもつらかったんだ。さやよりもずっと。

「おばあちゃん、わたし……」

いいかけたさやをさえぎるように、おばあちゃんにはぎりしめた手に力をいれます。

「でもなあ、さや。とぼひき神さまがならし
てくれたんやで。ええことがまっつつたんや。
ほれっ、さやがばあちゃんのとこに来てくれ
たやろ」

しみじみといいながら、さやをきゆうつと
くるみこんでくれました。

「ばあちゃんにはさやがおる。さやがおって
くれる。さやさえおってくれたら、何にもい
らん」

さやがここにいる。ただそれだけでいいと
いつてくれるおばあちゃん。

「おばあちゃん」

さやは、おばあちゃんにしがみつきます。

「さや、いっしょに、ええことをいっぱいみ
つけような」

「うん」

かおをあげて、前をむいて、さやはしっか
りとうなずきました。

(注 1) 一斗いっとう桶 (一斗ます) || 一斗 (一升しゅうの

十倍・約十八リットル) の量を測る枡

(注 2) 斗とぼうぼう || 穀類を測るときに、枡に入れ

たものを平らにならすぼう